

御在所岳（1209m）～伊吹山（1,377m）へ



（御在所岳・藤内壁）

日 時 2020 年 9 月 2 8 日（月）～30 日（水）

参加者 石川 誠 ・ 佳子

行程

9/28 日（日） 自宅～品川～新幹線-名古屋-名鉄高速バスで湯の山温泉ロープウエー着

9:15 分着-9:45 発-11:10 藤内小屋 11:25-13:50 国見峠 13:50 朝陽台-山の上公園

14:50 御在所岳頂上－15:20-ロープウエー下降湯の山温泉着

自宅を 4 時 30 に出て品川～新幹線で一路名古屋に向かう。名古屋からは名鉄の高速バ

車で凡そ 1 時間湯の山温泉、御在所ロープウェイ駅に 9:15 分に到着する。

ここからは国見峠に突き上げ、藤内壁を見ることが出来る裏道コースを辿ることとする。



(北谷を渡りながら)

道は北谷沿いを鉄製の橋を左右に渡りながら巨岩が累積する谷沿いのコースを進む。

途中、左岸に日向小屋を見上げながらなお進むと、しばらくして藤内小屋が中州の高台に建っている。北谷は、2008年の集中豪雨で荒れてこの小屋も土石流で大きな被害を受け、クライマーなどボランティアによって復旧

されたと最近見たテレビでも紹介されていた。



(藤内小屋)

中々大きな小屋で立派であったが、休日だけ開けるとのことです管理の方は不在であった。この小屋は関西のクライマーのメッカであり、藤内壁のベースともなっている。鎖場など岩の尾根を辿り暫らく行くと藤内壁を見

上げる場所に着いた。

ここで逆光ながら壁の様子を見学する。左のスラブ帯上部の岩場を二人連れのクライマーが取りついていて、中々高度感もあり、暫らくその登攀を眺めながら壁の様子を観察する。今回の第一の目的は、この噂の素晴らしい壁を見学するために来た様なものだ。

さすが関西の岳人達がアイガーやヒマラヤなど海外遠征に向けてトレーニングされた場所

で、多くの著名なアルピニストを輩出してきた壁としてつとに有名でもある。

後は低木帯の岩尾根を辿り国見峠に着き、稜線を暫らく登れば御在所岳の頂上である。

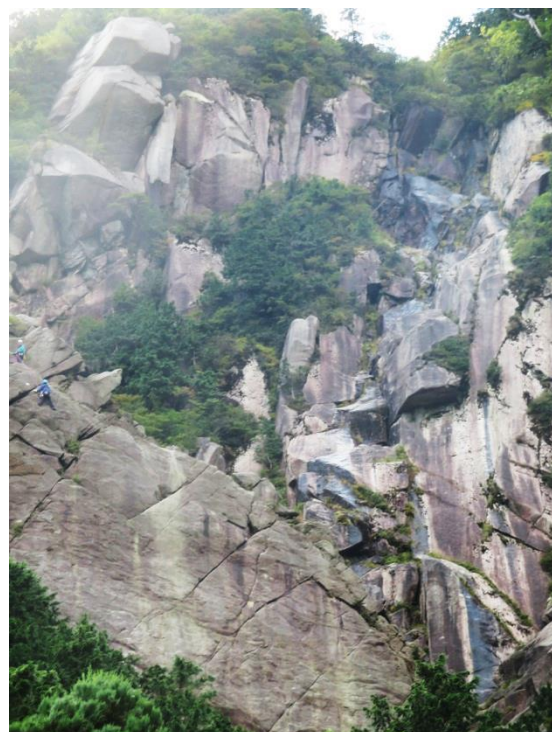
頂上には天気も良く多くの観光客が居り、しばらくは、鈴鹿の山々を睥睨する。

下りはロープウエーを利用して湯の山温泉駅に戻り宿に入った。

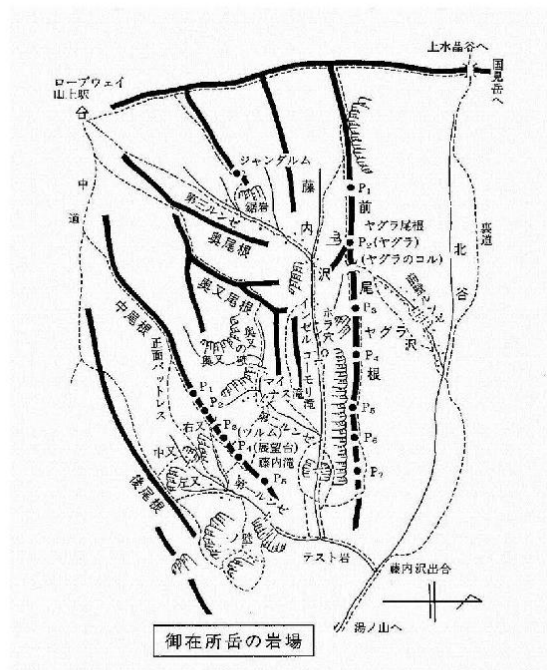
もちろんG o ・ T o ・ C a m p a i g nを利用し、暫らく振りにゆったりと温泉に浸りながら、至福の時間を過ごすことが出来た。



(花崗岩に覆われた中道登山道)



(藤内壁・左中間に登攀者を見る)



(国見峠)



(御在所岳頂上)



(稜線から見下ろす四日市市街と伊勢湾)



頂上には、山口誓子の歌の碑があった。「雪嶺の大三角を鎌と呼ぶ」



(伊吹山 1,377m J R・東海道線から)

9/29 日（火） 宿舎 8:26-近鉄四日市線・近鉄名古屋線經由名古屋駅- J R東海道線大垣經由
近江長岡駅 10:36 着宿の車で伊吹岳 3 合目登山口へ 11:30 発-14:00-伊吹山登山道頂上
15:00 発-往路下山 17:30 伊吹高原荘着



(5 合目から頂上を望む)

湯の山温泉からは、宿の車に駅まで送っ
て貰い、近鉄四日市線・名古屋線を乗り継ぎ
名古屋に戻り、J R東海道線で途中大垣、関
ヶ原の駅を過ぎて近江長岡駅に着く。

駅では今夜お世話になる、伊吹高原荘の

親父さんがマイクロで迎えに来てくれて

いて、伊吹山登山道 3 合目まで、送ってくれるという。

この3合目迄の道は、ゲートがあって一般車両は通行禁止なので大いに助かった。

林道は、1車線の細い道をジグザグに登っており対向車が来たら苦勞する道で、この道を83歳のドライバーである親父さんはハンドルを巧みに操ってグングンと登って行く。途中には、今晚お世話になる伊吹高原荘のロジがあった。

しばらく高度を上げ、3合目の登山口に到着する。ちなみに親父さんは、地元のバス運転歴も長く83歳の高齢にしては素晴らしい腕前で感心してしまう。

3合目で身支度を整えスタート。ここからは頂上まで一望でき、4合目までは割合緩やかで、5合目からは石の多いジグザグの道を辿る。6合目には避難小屋が有り、傾斜も強くなる。後ろを振り向けば、眼下に街並みと琵琶湖、鈴鹿の山々を望むことが出来る。

湖の中に浮かぶ小島は、琵琶湖周航の歌で有名な竹生島であろうか。

この山は、花々の山として有名だが、花の盛りは7,8月とのことで余り多くの花は見る事が出来なかった。

7・8合目を過ぎる頃には、上から地元消防学校の生徒たち4.50人程が訓練として、又、地元小学生たちも集団登山として下山してくるのに出会った。この様に伊吹山は多くの登山者に、いろいろな形で愛されている山なのである。



(消防学校の生徒たち)



(7 合目付近から振り返って)



(伊吹山頂上にある、日本武尊像)





(トリカブト)



(鹿の群れがあちこちに)

しばらくして稜線に辿り着く、生憎曇っていて視界は利かず、涼しくなる。頂上には 2.3 軒売店があり、バスで登山する旅行者も多く見えた。

頂上で 1 時間ほど食事や散策などで時間をつぶし元来た道を下る。道は石ころも多く注意してのんびりと下ってゆく。途中から甲高い鹿の声が聞こえる。かなり多くの鹿が生息していて、その多さはかなり群れを成していて、花や低木の被害が心配される。目の前には琵琶湖も見えて竹生島が遠くに浮かんで見えた。

「秋の陽は釣瓶落とし」のたとえ通り、のんびり下っていたら宿の奥さんが心配して迎えに来てくれた。申し訳なし。1 合目登山口にある伊吹高原荘に到着し、落ち着く。風呂は山で採った薬草湯であり、山の疲れも幾分和らいだ気がした。



(遠くに琵琶湖が見える)

宿はロッジ風で、多くのスポーツ団体が合宿する
様で、横須賀市立田浦中学校の生徒たちも体験学習
で利用して戴いているとのことで親近感が増した。

宿のご主人ご夫妻は、83 歳、奥様は 78 歳、私と
同年齢で話も弾む。子どもさんが 4 人孫 1 1 人と

のことで、家族的な宿で、食事も家庭的な料理で

品数も多く出て、食べきれず残してしまったのが申し訳なく思っている。翌日もご主人の運転で駅
まで孫 2 人をのせて送って戴く。琵琶湖の話をしたら、良かったら長浜まで送るよと言ってくれた
のには、さすが辞退したが感謝に堪えない。山の上の生活は、多々ご苦勞もあると思うが、それにも
増して永年生活してきた自然の中に溶け込み、孫たちものびのびして子犬の様にじゃれ合っ
て遊んでいる様子に幸せを感じさせてくれた。いつまでもお元気でと願うばかりである。

一緒に撮った写真は 3 日後にお礼と共に送りした。



(ご夫妻とお孫さんたちと)



9/30 日 (水) 宿舎-近江長岡駅 9:30-大垣経由-10:28 - 名古屋駅 11:36 新幹線品川 -

京急で帰宅 14:00

無事帰宅した。

石川誠 記